

イタチごっこは続くよどこまでも

—ボクの全カリ授業奮戦記—

藤井 淑禎

このところボクが関係する全カリの授業は、休日の横浜駅のコンコース並みの混雑か、東上線のどこかの小駅の駅前大通り並みの閑散か、のどちらかだ。ちょうどいい適正人数での授業というのになかなか当たらない。

もっともこれは最近では文学部の授業でもそうなのだから、やはりこっこの「操作」の仕方が、時代というか、学生気質と合わなくなっているという面もあるようだとは自分でも自覚している。文学部の場合は、前はカクカクシカジカのことをシラバスに書いておけば学生がこんなに押しかけてくるということはなかったのに、というようなケースがほとんどで、東上線の駅前のようなことはさすがにない。でも、まあ、これは、全カリと違ってそんなに選択肢が無いからだろうとは思っている（06年度からの「改革」でますます無くなる）。

で、肝腎の適正人数対策だが、文学部の場合、毎回発言しなくてはならないからテキストを精読してくることが必要、と書いたら何年かは、持った。要するに、ほどよい人数の受講生が集

まってきた。ところが最近はその書いても押しかけてくる。どういふつもりか、理解できないが（やる気のある学生が増えたという理解もありえなくはないが、たぶんそうではない）、おもしろいことに、と言うべきか、皮肉なことに、と言うべきか、押しかけられると「全員が毎回発言」しなくてはならないような授業などはできなくなってしまふのだから、彼らのほうが賢いと言わざるをえない。で、こちらとしては、適正人数維持のために別の文言を考えなくてはならないことになる。でも、おそらくこれもイタチごっこだろうけれども。やむを得ず今考えているのは、5限とか1限に開講するという奥の手。さいわい、今度の一年間は研究休暇だから、最後の手段としてそれに踏み切るかどうか、じっくり考えようと思っている。

ところで、全カリだが、ボクがふだん担当するのは、ドラマ学という授業だが、最近、何人かの人と一緒に総合Bの「高度成長と文化の変容」を、そして昨年は、R科目の「乱歩再発見」を担当した。そしてそのどれもが見事

に「操作」に失敗し、惨憺たる結果に終わっているのである（後述するように、中身はバッチリですよ、念のため）。

ずっとやってるドラマ学の場合、当初から、学生たちの発表を主体に、と考えていたので、最初の何年かは、一回目にレポートを出させて、「受講を遠慮してもらいたい人たち」をはじき出した。選抜するのは科目の趣旨からいっていけないそうなので、間接的な「選抜」にしたというわけだ。具体的には、研究室のドアに「受講を期待されている方たち」の名前を張り出す。これは、一種の合格発表のようでもあって、学生たちにはずいぶん好評だった。不満もなかったし、「期待されている」ほうに入った学生たちは、まるで志望校に合格でもしたような気分得意気揚々と通ってくる。

でも、それも今は昔。学習指導要領のせいかセンター試験のせいかわからないが、学生気質も変わり、レポート用紙数枚の事前レポートまで書いて受けようという学生はだんだん減ってきた。で、それに合わせて、こちらも、当初の三枚を次第に減らし、一枚にまでしたのだから、考えてみれば、ほとんどコメディだ。でも、やってる本人はしごく真面目。なにしろ傷つきやすい性格なので、人数とか受講のマナー違反とかはしごく気になるのだ。

そんなわけで、一枚にしても適正より少ない目になってしまったので、ある

年にこれをやめた。そうしたら、押しかけて来ること来ること。当然、受講生による発表などはまともにできない。それでもいちおうやってもらったが、時間不足にはまいった。マナー違反も目に余った。掲載誌の性格上、ここには書くのは控えるが、短気で一本気で正義を重んじ不正を憎む（同じことか）当方としては、毎回カッカツとなりっぱなしだった。

で、翌年からはまた一枚レポート方式に切り換えた。人数は少な日だが、まア、往年の雰囲気は少しは見られ、このくらいで満足しなくてはと思っている。イキの点でかつてと比べて今イチなのは、これこそ学習指導要領とかセンター試験、学校・家庭での生育環境、遊び環境などのせいだろうから、一授業がどうこうできる問題ではない。でも、下降いっぽうだった日本のドラマが上向いてくれば、学生たちの反応もまた変わってくるのではないかと期待している。

*

大人数のドラマ学を体験したあとに、前記の総合Bの「高度成長」を体験した。これは250人くらいの受講者数だったが、3人の教師が常時教室にいることもあり、またテーマに意欲的に取り組む学生も少なからずいて、まずまずの授業環境だった。マナー違反もわずかで、それも注意すればおさまった。ただ、ここでの初体験は、そのつもりがなくても「寝てしまう」学生

が出現したことだ。かつてだと、居眠りイコールさぼりだが、新卒のそれは、生活習慣に帰因すると思われる体質ないしは病気だ。だから注意してもこちらが無力感に囚われる。さらに問題なのは、何ヶ所かにそのかたまりがあると、話す時間と注意する時間が接近してくるということだ。何しろ、体質ないしは病気なので、注意してもまた繰り返す（本人に悪気はなくても）。で、だんだんと注意時間が講義時間に肉迫してくるというわけだ。もっとも、そうしたことは予想できたし、注意ばかりしては大部分の学生に迷惑なので、実際は注意は極力控えたけれども。

で、そうこうしているうちに、ゲスト講師の授業の日となった。講師はボクがその仕事ぶりをつねづね敬愛してやまない川本三郎氏。前回くらいから受講マナーについて注意を促し、実際にもまずまずとボクには見えたが、もちろん完璧とまでは行かない。川本氏も口にごそ出されなかったものの、いくぶん納得のいかないご様子だった。実は、このおりのことは、日本文学科の同窓会ニュースに少し書いたので、それをここに引用させていただく。

『もちろん九割くらいの学生は熱心に聞いているのだけれども（総数250名ほど）、私語をするかたまりが毎回一つ二つと（ただしこれは注意すれば収まる）、そしてより厄介な

のが、居眠りをするものがこれも毎回10から20名ほどいることなのである。

▽ボクもかつては居眠り者には必ず注意し退室させたりしたもののが（ただし日文や文学部の授業）、現在の、しかもいろんな学生の混じる全カリなどの授業では、それが不可能になっているのではないだろうか。人数といい、常習＝効き目の無さといい、いったん注意し始めたら、授業ではなく注意のほうの主になってしまうような気がする。そうなれば九割の学生には迷惑な話だろうし、やむをえず次善の策として居眠り者はほうっておいて授業に集中するということにもなる。

▽外からの目、というような言い方で事前に注意しておいたにもかかわらず、川本さんの講義の時にもこれが見られた。たいへん面白いお話だったので、それもあって川本さんはだいぶご不満そうだった。コーディネーターのボクとしても、顔から火が出る思いだった。だが前述のごとく、注意すれば片付く問題ではないことも確かだ。学生の実態に応じて、授業のやり方も注意の仕方も柔軟に変わらなくてはならないのは当然だが、そうすると他方ではこんな問題も起こってくる。ともかく今年久しぶりに大人数を引き受けて四苦八苦したドラマ学の授業といい、いろんなことのあった年だった。来年の

乱歩の授業こそはスマートに乗り切り
りたいものだ。]

*

で、ここからが本題の「来年の乱歩
の授業こそは」、になるわけだが、結
論から言えばこの授業は、「スマート」
と言っていいかどうか、ともかく人数
少な目の年のドラマ学型授業となっ
た。結果的に言えばこれも当方の「操
作」ミスということになるのだろうが、
立教が乱歩邸を買い取ったということ
も広く知られ、乱歩展直後ということ
もあり、殺到が予想されたので、事前
レポート三枚どころではない、大変な
関門を二重三重に設けておいたという
わけだ。今となってはシラバスを転記
するのもお恥ずかしいので、関心のお
ありの向きはそれを参照のこと。で、
ともかく、「そんな」意欲的な学生は
今の時代にはそれほどはいなかったと
みえて、東上線の駅前並みの状態での
スタートとなった。

ようやくこころあたりから、編集サ
イドから本来期待されている「授業探
訪」「授業紹介」に入るわけだが、ボ
クの特論として、授業は、中学生にも
分かると同時に同業者でも退屈しない
ようなものでなくてはならない、とき
めこんでいて、いつもこのことだけは
しっかり守るように心がけている。中
学教師から大学教師に転身された恩師
の越智治雄先生の受け売りだが、とに
かくこれだけは死守したいとつねづね
思っているのだ。もっとも、専門や科

目によってはそんなわけにも行かない
授業があることは承知しているが、さ
いまい、ボクの専門の文学とか文化と
かいうような領域はそんなこともな
く、おかげで今は亡き恩師の遺した言
葉を守れている。

要するに、わかりやすく、かつ、こ
こでしか聞けないような話をせよ（す
でに自分が本に書いたことすらも安易
に繰り返してはならない）、というこ
となのだが、ふだんそんな方針でやっ
ていて時々むなしく思うのは、ほとん
どの学生たちにはそれはわからないと
いうことだ。独創的なことを言おうが、
概説書に書いてあるようなことを言
おうが、ほとんどの学生にはわからない。
といて、これはボクだけの独自な見
解だよ、などと言うと品が落ちるし、
言わないと今度は、索漠とした思いを
嘯みしめることになる。

で、今年の乱歩の授業だが、これま
での乱歩研究のかたよりを批判するか
たちを借りて、なるべく独自さを、ア
ピールするように努めた。そしてそれ
はかなりの程度分かってもらえたよう
に思う。いつもの索漠とした思いを比
較的嘯みしめなくてすんだ、というこ
とだ。

夏の某デパートの「江戸川乱歩と大
衆の20世紀展」でも、「国文学解釈と
鑑賞」の別冊「江戸川乱歩と大衆の20
世紀」でも、従来の乱歩研究の偏向を
批判しつつ、これまで軽視されてきた
一連の通俗長編こそが重要なのだとい

う観点を打ちだし、関東大震災後の帝都の復興・大衆の生活のモダン化と乱歩ミステリーとの連携ぶりに注意を促してきた。授業でもやはりそうした観点から、時代を読むことと乱歩ミステリーを読むことを同時進行のかたちで進めていったわけだが、何しろ回数も12回前後あり、前記の二つではできなかったことにも歩を進めることができた。大衆歌謡とかエロ・グロ・ナンセンスにも手を付け、その難しさを受講生諸君と共有した（要するに、むずかしくてどう考えればいいのかわからなかったということ）。

ここで、配布したレジュメに基づいて、授業の進行表を掲げておこう。

- I カーチェイスの元祖・乱歩ミステリー
- II 炎の京浜国道
- III 乱歩 vs. 京浜国道
- IV 車と法規の抗争史
- V 明智事務所変遷記
- VI 文化住宅とその理想
- VII エロ・グロ・ナンセンスの時代
- VIII モダン東京エロ風景
- IX 流行歌に見るモダン東京

と、なる。これらを十数回かけてこなしたわけだが、こうして並べて見ると、時代のカバーの仕方は自分で言うのも何だが、なかなかのものに見える。でも、実際は、Ⅷ以降はまだまだこれからだ。もっともエロ・グロや性の問

題は教室では扱い方がむずかしい。そんなことも今回結果的に学生たちに教えてもらったことになる。

こんな具合に、時代と乱歩の捉え方に関しては新機軸を打ち出せたと自己採点しているが、授業のやり方でも、自分としてはいろいろ機材を活用しながら試させてもらった。当時の地図を多用したので、レジュメだけでは足りず、書画カメラにはずいぶんお世話になった。また、ビデオやDVDも活用した。DVDはまだまだ互換性が十分ではないので、手作りのそれはいろいろ困難もあったが、まずまず使えることができた。昔の京浜国道を写真に撮ってきて、それをパソコンで見せたりもしたが、圧巻は、小津映画を五分ずつくらのシーンに断片化してDVDに収め、それを見ることで乱歩ミステリーの作中シーンへの想像力を喚起しようとした試みだ。これは見事に成功し、小津映画の閃光で深夜の街を走るシーンなどが、いかに小説の理解を深めたことか。

乱歩が実生活で京浜国道沿いの車町から池袋に転居したのは、京浜国道の騒音と排気ガス・臭気などにまいったからだ。その騒音を何とか体験してもらおうとトーキー映画を利用しようとしたが、これは徒労に終わった。現場の音をそのまま記録するような録音方式は戦後だいぶたってからでないと登場しないことなども、こうした準備をする過程でわかったことだ。だから

この授業には、ボク自身も大いに教えられたことになる。

新しい機器を使っての授業は当然のことながら学生たちには大変好評だった。暗幕や照明の係とかも率先してやってくれたし、毎回書いてもらったリアクション・ペーパーを見ても、そのことはよくわかる。ふーふー言いながらの授業ではあったけれども、ボクはもちろん学生たちも、得るところが多かったのではないだろうか。大学のホームページで授業紹介をさせてもらったところ、それを見た某文化センターから連続講座の依頼があったことなども、一つの手応え・収穫として受け止めている。

ところで最終レポートを受け取って気がついたことが一つある。授業には毎回出席しながら、レポートは出していない学生が何人もいたということだ。自分に都合よく考えれば、単位としてとる必要はないのに出席し続けたということなのだろう。ろくに出席もしていないのにレポートだけは受け取ってもらおうとする学生は珍しくないが、その反対の学生をこれほど多く受け入れた授業は、ボクとしてはひょっとすると初めてのことだったかもしれない。

ふじい ひでただ
(本学文学部教授)